

茨城県
教育
研究会

会 報

第175号

＜「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の改善・充実＞

特集 「提言」「教育座談会」「新会員2年次研修」

平成29年10月6日

茨城県教育研究会

代表者 小島 睦

事務局 水戸市大場町933-1
教育プラザいばらき内

TEL 029-269-1300

FAX 029-269-1304



体育祭での応援団校歌熱唱

主体的・対話的で深い学びを通して身に付けたい資質・能力



茨城県教育研究会副会長

海老原 治夫

昨年末の中央教育審議会答申に、二〇一五年日本の生徒と海外の生徒との国際比較(TIMSS2015とPISA2015)がありました。世界の先進約四十カ国の調査では日本の生徒の学力は上位に位置しています。しかし、中学生及び高校生の意識調査で「自分には人並みの能力がある」の割合が低く、「自分はだめな人間だと思ふことが多い」が多い。また意識調査で「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」が圧倒的にアメリカや中国、韓国に比べて低いが気になりました。

それでも国内調査で「人の役に立つ人間になりたいか」の「そう思う」割合が十年前に比べて増加しています。子供たちに、「自分がよりよい社会づくりに貢献しよう」という心を育てることは喫緊の課題ではないかと思えます。

さて、外国どころか国内の情報も乏しかった幕末に、吉田松陰の

松下村塾では、松陰が全国行脚で得た情報(飛耳長目録)から塾生がテーマを選んで自分の考えを文章にまとめ、それをもとに討論したという。地方の藩校でもない名もない塾から日本を変える逸材が輩出した教育の意義は大きいと思えます。

本校では、全ての教科等で主体的・対話的で深い学びを通して生徒の自己肯定感や社会参画意識を育成すべく授業研究を実施しています。一学期には二年生の道徳にJICA職員をGTに招き、「国際的視野に立ち、世界の平和に貢献する」テーマで授業を展開し、意見交換をしました。

本校では、学校教育目標を受け、キャッチフレーズを「Your Dreams Create The Future」としました。教科等の指導を含め全ての教育活動を通して、生徒が夢に向かい自分や学校・校歌に誇りをもって、よりよい社会づくりに貢献してほしいと願った教育活動を推進しています。

提 言

私たち現場の教職員に向けて、取り組むべき課題や目指すべき方向等について、本県教育界を代表するお二人に、熱意あふれる御提言をいただきました。



教師にゆとりを

新教育課程実現の鍵

元茨城県教育研究会長 梅原 勤

新教育課程が求めるもの

- ・主体的・対話的で深い学び
- ・小学校の外国語の拡充
- ・特別の教科道德の導入
- ・その上従来の教育内容は維持
- ・地域課題対応の教育課程等々

こうした課題が果たして実りあるもののできるのだろうか。
教育はスパイラルで進展する

戦後の教育は経験主義学習に始まり、単元学習を進めたが学力低下の心配から系統学習へ舵を切る。

その後は教育の現代化や人間化、そしてモチベーションや自己教育力の育成、知識や技能の確実な修得と関心・意欲・態度を重視する。「生きて働く学力」「主体的で確かな学び」へと進化する。

この時点で正に指導指針は螺旋的に繰り返されて今次求めるものと変らないものとなっている。

そして、さらなる揺さ振りが五十年代に入ると校内暴力やいじめ、不登校問題が学校の在り方を問い、生活科や選択教科の導入、自主性・自律性が強調された。

平成十年の改訂では、教育内容の厳選と時間数の削減、総合的な

学習の時間の導入など、ゆとりの中で「生きる力」を図ることとした。

しかし、これらは学力の低下をもたらしたとして、その後はひたすら量的拡大と課題解決能力が求められてきた。

この間、先生たちは未達成感にさいなまれながら奮闘努力を重ねてきたのである。

増幅増大する教育の質と量

しかるに今また、これでも足らぬとばかりに外国語教育の強化や道德の教科化を図り、さらには地域課題対応の教育課程を問い、その上、再び「主体的・対話的で深い学び」を求める。

私はこれを批難するものではない。社会の進展が生む必然なのだ。しかしながら、先生たちへの叱咤激励だけでは、その達成はとうてい望めないと言いたいのである。

今の先生たちに、使命感と努力を訴えるだけで解決できるほどの課題では決してない。

最近の文科省の調査によると、小学校の33%、中学校の57%の教員の勤務時間が、いわゆる過労死ラインを超えるという。一昔前

の私たちの時代も超過勤務で大変な時もあったが、日常ではなかった。しかしながら今はどうだ。質・量ともに増幅増大し、日常的に多忙なのだ。

教育の効果は教師の創意工夫次第

教育という仕事は教師力がものをいう。教師力とは、常に自らが学びの二本であり続けることであり、創意と工夫に満ちた豊かな存在であることだ。

有資格者である教師は、使命感もあり、教育方法の原理原則は百も承知だ。しかしながら、目の前にいる児童生徒のモチベーションの高揚と深い学びは、教師自身のモチベーションと創意工夫によつてしかもたらされないものである。

教師にゆとりを

新教育課程が掲げる主体的・対話的で深い学びの実現のために、今最も有効な処方箋は、教師にゆとりを与えることである。モチベーションを高め、創意工夫するための時間的ゆとりが必要なのだ。

小学校に専科教育の新たな配置を

解決策は、小学校には専科制を取り入れ、理科、音楽、図工、英語などの専科教員を配置することだ。併せて普通学級の特別支援を要する児童への補助員や学校司書の配置も是非とも必要だ。

小学校教員は通常一日六時間の毎時間異なる教科の指導と担任学

級の指導等を行うのだが、いつ工夫された授業を考えたり準備したりできるのか。結局、時間外と休日を使う以外にないのだ。

本来は毎日の勤務時間内で授業の準備や事後処理が可能になるよう学級担任の授業時数を削減する必要がある。そのためには専科教員等の増員配置が待たれるのだ。

ちなみに、今講じられている少人数指導のための教員配置だけでは多忙の削減にはならず、小学校教員のトイレにも行けずとの叫びは続く。

中学校にあっては部活動指導員の配置と学級担任の授業の削減を

中学校では通常一日五時間の教科の指導と担任学級の指導等を行う。小学校に比べて専科制なので教材研究には条件が良いが、中学生だけに生徒指導等困難な問題も多く抱える。加えて、教育課程外とはいえ部活動の指導には毎日二〜三時間は割かねばならない。

さらには休日もだ。それでも高いモチベーションと使命感に支えられてがんばっておられるのだが、部活動指導員が配置されれば、教育課程内の指導の充実が図られよう。個性を伸ばす教育は部活動だけの占有領域ではないのだから。

多忙の行く末は定形化・形骸化

多忙の解消のためには当然効率化が図られる。そしてそれは定形

化を生み、形式化・形骸化へと進む道でもある。教育指導には何ともしも避けねばならないことだ。もう既に見られる現象がある。主体的・対話的で深い学びとのかけ声が、早速安易なグループ学習を生み始めている。グループ学習は話題の広がりや作業、調査、討



鹿嶋市授業改善プロジェクト
『主体的・対話的で深い学びとカリキュラム・マネジメントの充実を目指して』

鹿嶋市教育委員会教育長 川村 等

平成二十八年十二月の中央教育審議会答申を踏まえて小中学校の次期学習指導要領が平成二十九年三月に文部科学省より示された。

今回の改訂では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進から、子供たちが学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付けつつ生涯にわたって能動的に学び続けることができるよう育てることが求められている。本市では、平成二十五年度から、子供たちの主体的・能動的な学習の実現に向けて講師として前文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官の井上一郎先生を招聘して鹿嶋市授業改善プロジェクトをス

議などには有効であるが、深い学びには向かない。やはり、先生と子供たちとの真剣な対話による深まりが重視されねばなるまい。先生たちの創意に満ちた指導を期待するからには、先生たちのそれを可能にする時間的なゆとりを、社会全体で保障せねばなるまい。

ターゲットした。

平成二十五・二十六年度は、子供たちの主体的・能動的な学習の実現を目指して授業改善を進めた。鹿島小学校と大野中学校の二校を実践協力校として、「教えを

少なく、学びを多く」をモットーに教師が子供たちへ一方的に説明する一斉指導の授業形態から脱却し、子供たちの思考や活動の多い授業・子供たちを主役とした授業づくりを追究した。なお、平成二十六年の中央教育審議会諮問として『主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）を文部科学大臣が示したことで、本市が進める授業改善の方向性が適切であると確認できた。平成二十六年年度までの課題とし

て、実践協力校以外の研修や実践がなかなか進まないことが挙げられた。実際に「授業づくり」に取り組まないと研修内容の有効性を実感できないという市内の先生方からの声もあった。そこで、平成二十七年年度から二十八年度の二年間で市内十七校の小中学校による授業公開を実施した。また、各校

で進める授業改善の柱として、児童生徒自らが見出す、単元を貫く学習課題の設定とその課題の解決のための学習計画づくりに焦点を絞った。さらに、教育指導課担当者には、単元全体と単位時間の学習の授業づくりについての視点を示し、市内各小中学校の研修の方向性を整えるよう指示を出した。

平成二十九年年度は、小中学校から五校の研究推進校を選出し、授業研究とカリキュラム・マネジメントに着目した研修を進めている。今後も授業改善のための視点に常に改善を加え、鹿嶋市の授業の質をさらに高めていきたい。最後に、今年度の授業改善七つの視点を示す。

【単元構想について】

- ① 児童生徒自らが単元を貫く課題を設定し、その解決のための学習計画を立てている。
- ② 児童生徒が単元全体に対して学習の見通しをもっている。
- ③ 児童生徒がそれぞれに役割をも

ち、単元を通して主体的・対話的で深い学びを行っている。

- ④ 児童生徒が単元の終わりに「何を学んだか」「何ができるようになったか」を振り返って確認している。
- ⑤ 授業者は汎用的な能力の育成と知識・理解の定着のためのプログラムを単元計画に盛り込んでいる。
- ⑥ 授業者は単元全体を通して児童生徒から様々な考えを引き出し、児童生徒の思考を深めたりするための具体的な手立てを講じている。
- ⑦ 授業者は単元を通して児童生徒から様々な考えを引き出し、児童生徒の思考を深めたりするための具体的な手立てを講じている。

【単位時間について】

- ① 児童生徒が単位時間の学習課題を事前に把握して、学習の準備を主体的に進めている。
- ② 児童生徒が単位時間の学習の見通しをもっている。
- ③ 児童生徒全員が単位時間の中で役割をもち、主体的・対話的に課題解決をしている。
- ④ 児童生徒が単位時間の終わりに何を学んだかを振り返っている。
- ⑤ 授業者は、パーソナルワーク、ペアワーク、グループワーク、クラスワークを適切に位置付けて

た授業構想を立てている。

- ⑥ 授業者は児童生徒から様々な考えを引き出し、児童生徒の思考を深めたりするような具体的な手立てを講じている。
- ⑦ 授業者は授業者自身が説明する場面を少なくし、児童生徒に説明・進行させる場面を多くしている。

【カリキュラム・マネジメントについて】

- ① 学校は児童生徒に身に付けさせたい資質・能力が何であるかを明確にしている。
- ② 学校は児童生徒が学ぶ意義をもたせ、何を学ぶのかを認識させるために、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程を編成している。
- ③ 学校は汎用的な能力の育成と知識・理解の定着を意識した年間指導計画を作成し、学習と指導の改善充実を図っている。
- ④ 学校は児童生徒の発達段階に応じた指導と支援を実践している。
- ⑤ 学校は児童生徒に対して育成を目指す資質・能力が身に付いたかを適正に評価している。
- ⑥ 学校は社会に開かれた教育課程の理念を実現するために必要な方策を実践している。
- ⑦ 学校は学校内外における学習意欲の向上と学習時間の確保のための方策を実践している。

■教育座談会■

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた 授業の改善・充実

平成29年8月4日（金） 於 教育プラザいばらき



茨城県教育研究会副会長
伴 敦夫

主体的・対話的で 深い学びをめざして

本年度、茨城県教育研究会では、「社会に開かれた教育課程の実現に向けた研究の推進」と「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の改善・充実」を目標に、研究に取り組んでいます。

その一つとして、今回、県内の各ブロックから推薦された五人の先生方にお集まりいただき、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の改善・充実」をテーマに座談会を開催いたしました。

座談会では、始めに、各学校の特色について、「確かな学力の習得と活用する力の育成について」の取組を含めてお話ししていただきました。地域の強みを生かしながらそれぞれに特色ある教育活動が展開されていることに、先生方も興味深く聞き入られていました。

その後、次の五つの柱で話し合いが進められました。

○「主体的」「対話的」「深い学び」、それぞれをどう捉えているか。

○なぜ「主体的・対話的で深い学び」が求められているのか（必要なのか）。

○「主体的・対話的で深い学び」を得るために、学校でどんな取組を行っているか。

○これまでの取組で、どんな成果があったか。

○今後「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の改善・充実を図っていく中で、どんな課題があるか（妨げや障害となることは何か）。また、それをどのように解決していったらよいか。

やや緊張した面持ちでスタートした座談会ではありましたが、お持ち寄りいただいた資料等を見合ったり、質問し合ったりするうちにすぐに打ち解け、和やかな雰囲気の中で、本音を出し合いながらテーマに迫る深い学びの話し合いが行われました。

本研究会では、会員相互の研究や活動の拠点として教育実践に役立つ活動を目指しています。この教育座談会は大変意義深い事業であると考えます。運営に御尽力いただきました司会者の片岡満先生はじめ企画委員の先生方、記録に当たられた会報・紀要委員会の先生方に改めて感謝申し上げます。

■司会者
 片岡 満
 (行方市立玉造小学校)

■出席者
 湖口 悟
 (大子町立生瀬中学校)
 田邊 佳代
 (常陸太田市立機初小学校)
 横田 聡
 (鹿島市立鹿野中学校)
 鈴木 京子
 (つくば市立竹園学園)

■主催者
 茨城県教育研究会会長
 小島 睦
 茨城県教育研究会副会長
 伴 敦夫
 石川 八千代
 石崎 千恵子
 富永 保
 海老原 治夫
 支部代表
 日下部 秀雄
 鈴木 克彦
 酒井 和美
 岡野 克巳
■研究部代表
 朝倉 美広
 添田 智

(敬称略)



片岡 満先生

各学校での授業改善の取組

司会

本日のテーマですが、「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業の改善・充実」ということです。今日は、このことについて話し合い、今後の授業改善の取組に生かしていただければと思いますので、各学校の特色と授業改善の取組の紹介をよろしく願います。

湖口

本校は、全校生徒三十名の小規模校で学年一クラスという状況です。生瀬小学校からしか進学してこないで、一小一中で小中連携などに取り組んでいます。今日のテーマにも「対話的な学び」とありますが、小規模校なので、できるだけ外へ情報を発信しようということを中心に、ここ三年間ほど行っています。一つ紹介しますと、大子町では「大子学」というのを小一から中三までの九年間、どの学校も共通題材で取り組んでいます。NHKでも紹介されたのですが、中学校三年生が子供議会というものを実施しまして、

大子町への提言をしました。その提言が採用されると来年度以降、実現されるようになります。グッドモデルを示して町のことを考えることで、情報発信を町内全学校や町ぐるみで行っています。中二では、校内文化祭で地域の方や小学生、中学生、高校生、高齢者の方々を集めて、大子町検定を実施いたしました。

田邊 本校は近くに里川が流れ、自然豊かなところです。校庭には、移築された古墳が二基あり、孔雀やウサギなど、たくさんの生き物を飼育して、心の教育にも力を入れています。伝統的に朝の活動で「いい汗かき隊」といって、高学年は「十分間走」に取り組んでいます。終了後、全学年で「ステップアップタイム」として、学力の向上を目指して、学習の補充時間を設けています。もう一つ、「ふるさとから学ぼう」ということで、里川の水質調査を行ったり、サケの稚魚を放流したりしています。また、地域の天文同好会の方に来ていただき、星の観察会を開いて、地域の人材・素材を生かした教育活動を行っています。

横田 本校の学区内には鹿島神宮があります。また、鹿島アント



鈴木京子先生

鈴木

竹園学園学区は、市の中心に位置しており、TXの開通に伴ってマンションや戸建てが増えています。五、六年生では教科担任制を取り入れています。つくば市は、中学校一校と進学する小学校を一つの「学園」と捉えて、小中一貫教育を進めています。学園のテーマは「主体的・協働的・創造的な生活の構築」というもので、まさに、指導要領に沿ったものだと考えています。

います。世界にはばたく児童生徒を育てることが大きな目標になっていて、これからの時代に必要な九年間の学びを系統的に進めています。

坪松 本校は、一学年四クラスずつ、四百人弱の学校です。三つの小学校から進学してくるのので、小中一貫の教育を進めるために、研修に取り組んでいるところです。昨年度からの目標「強い人になりましょう」の実現に向けて、日々教育活動に取り組んでいます。今年度は特に、「継続」「創造」「深化」「かけがえのない自分のよさ」「運命共同体」というキーワードをもとに教育活動を推進しています。また、生徒会活動が活発で「レベラアップ自分改革の道へ」をスローガンにして、より高い「強い人」を目指し、学習と部活動に取り組んでいます。

主体的・対話的・深い学びの捉え

司会

学習指導要領の改訂に伴って、そのポイントに理解の質を高め、資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」というように示されています。「主体的」「対話的」「深い学び」こ



湖口 悟先生

これらの一つ一つについて、どのように捉えているかを明らかにして、話し合いを進めていききたいと思います。

湖口 これらの三つの中で、一番「深い学び」というのが理解しにくいというか、捉えにくいと考えています。「主体的」というのは、自分から進んで取り組んで、最後に振り返りから次の時間の新たな課題や問題を発見して、というサイクルが回転していくというような捉えをしています。「対話的」というのは、言葉通り、人や書物や、あるいはネット上などで、自分の考えとのすり合わせをして、問い返しをしながら学んでいくというような捉えをしています。「深い学び」については、知識同士をつなげて深まりをもつことで、その深まりってなんだという、最終的には、「自分ができるんだ」という自己肯定感だったり、有実感だったり、そういうものが味わえるような学びと捉えています。これもまだまだ抽象的なので校内研修な

どで深めていこうと思っっています。

田邊 「主体的」「対話的」というのは同じ考えなんですけれども、「深い学び」というのはやはり、難しいと思っっています。「習得」「活用」「探求」という学習過程の中で、自己をふり返って自分をよりよく変容させることができ、さらに次の学びにつなげることだと思っっています。

鈴木 「主体的・対話的」というのは、アクティブラーニングとかで言われていて、さらに付け加わった「深い学び」というところが、すごくポイントだと思っっていて、私もすごく悩みました。例えば、主体的、対話的で学習をしていくと、「ああ、なんだそうだったのか」と悩んだ分だけ、分かったときにストンと落ちるような感覚があると思っっています。薄っぺらなうわべだけの理解ではなくて、本質的に物事を理解したというのが深い学びだと思っっています。例えば円の面積だったら、公式はわかるけど、どうしてそうなるのかを話し合ったり調べたりして、分かったときにストンと落ちる。そういうのが深い学びで、すべての授業でそこに行きつきたいと思っっています。

司会 やはり、形式的なものではなく方法でもなく、きちんとそれが身に付いていかないといけないものだと思いますね。

横田 「主体的」「対話的」というのは、今まで皆さんがおっしゃっていたものに加えて、自分で疑問をもつこと、周りのことに興味関心をもつということが主体的な学びにつながると思っっています。その課題などを自分事として捉えることができるというのが、深く考えられる状態にできると思っっています。そのためには、課題設定が重要だと考えています。「対話的な学び」については生徒同士の話し合いや、いろいろな人々との交流だけではなく、読書をして知識を取り入れていくというのも対話的な学びに入ると考えています。「深い学び」については、疑問に思っただけで、自ら追求していったり、学んだことを生かして自分で新たな解決策を見つけて出したりするというような活動も含まれていると思っます。逆に、「浅い学び」って何なのかと考えたときに、グループでの活動とか、クラスでの活動とか、生徒司会での学習活動とか、それを形式的に捉えて流すだけでは、対話的な状態は作れているかもしれないけれど、



坪松 栄先生

ど、「深い学び」にはならないと思うんです。生徒一人一人が自分で何かを創造的にしていけるということが「深い学び」が表していることだということように捉えています。

司会 「深い学び」と「浅い学び」という言葉ができましたが、対照的に考えていくと、「深い学び」がどういうものか明確になっってくると思うんですが。

坪松 「主体的な学び」とは、学習の課題を子供たちが自分で設定する、そして自分の目標、めあてをもつて学習に取り組むことが大切だと思います。「対話的」につきましては、ただの対話を通して思考を深めるだけではなく、地域・国際交流、あるいは書籍、教材や資料等の情報もすべて対話と捉えています。「深い学び」については、子供たちが単に回答を出すというだけでは、先ほど出た「浅い学び」になっってしまうと思うんです。回答を出してから、正解の根拠、理由、間違っただけの回答との

対比をしたり、他者に説明をしたり発信したりすることを「深い学び」と捉えています。

なぜ「主体的・対話的で深い学び」が求められるのか

司会 なぜ、主体的・対話的で深い学びの実現に向けての授業改善が小学校・中学校の指導要領の改定のポイントの一つになったのか。これまでの授業の在り方を振り返っていただいたり、これからの指導の在り方を転換された要因はどのようなことだったのか学校の生徒たちの様子をおりませたりしながらお話しください。

田邊 本校の課題としてお話しします。二つの小規模が吸収合併して六年目になっています。小規模校の学習方法は個別指導が主なものであったので、一人一人に手厚い指導がなされていきました。合併当初は、子供たちは一斉指導に慣れずに授業についていけない状況でした。ついていけない児童の学力を上げるということが大変で、その指導方法を模索する中で、ペアの学習にしたり、グループの学習にしたりすることで対話的な学びを取り入れられました。友達同士での会話を授業に取り入れることにより、

自分の考えを少しずつ話すことになり自信をもって発表することができるようになってきています。本校では、対話的な学びが必要だったと考えています。課題としては、数名で話すことはできるのですが、全体で話をするのが苦手な子供たちが増えてしまったことがあります。

鈴木

竹園東小の子供たちは能力があるのですが、自分で何でも行ってしまう傾向があります。授業中には、没頭して課題に取り組むことが多いです。主体的ではあるのですが、中には授業が対話的になったときに人の話を上手に聞けない児童が見られるときがあります。グループの中で自分の考えを伝え広げられず、話し合いにならないことがあります。そこで、本校では一つの目標として「対話的でみんなの意見を取り入れて考えを広げよう」として良い意見を出し合って「世界にはばたいて」ってほしいと考えています。実際に世界にはばたいていってほしい、自分一人ではどうもできないことがあると思います。携帯電話の機能が次々に作られていくように、激しく社会の変化の中で一人の力でどうにもならなくなったときに、チームで解決していけるようにしようとする意識を身につけ

坪松

なくてはいけないと考えています。自分と人が関わり合ってチームを編成して、自分がリーダーとなってチームを動かして活躍する子供たちを作るために、「対話的な学び」を深めていくことは重要課題だと考えています。

本校では、学力診断のためのテストの結果から各教科で「判断したり、推論したり、理由や根拠を説明する」の正答率から、学習の改善が必要だと捉えました。授業の中で課題に対してどのように思考し判断し表現するかなど、主体性を重視した自己選択や自己決定、自己表現する場の工夫が必要と考え、「主体的に対話的な学び」は大切なことだと考えています。

湖口

教師目線の授業から生徒が「わかった」と思える子供目線の授業に変えることが今回の指導要領の改訂のポイントだと捉えています。全国学力学習状況調査の問題は、公式を使って解くことのできる問題もあります。が、概念的な知識や意味理解を持ち合わせないと公式だけでは解けない問題があります。おそらく、「できる」ということが基礎、「わかった」ということが基本だと考えています。今回

横田

の改定で基礎・基本の考え方をおさえ直して、できる授業とわかる授業、基礎的な内容と基本的内容を区別する必要だと考えています。「主体的・対話的で深い学び」を主体的は基礎、対話的深い学びは基本と捉えています。

主体的については、生徒から「何でこれを勉強するのですか？勉強する意味があるのですか？」と聞かれることがあります。こう問われるということが、授業を生徒たちに主体的な学びとして捉えられていないと感じました。生徒にとつて役に立つこと、自分にとつて意味のあることと捉えていないことが原因だと考えています。校内のアンケートから見られた「自己肯定感が低い生徒がいる」といった課題を解消するためにも、授業を行う意味を生徒たちがしっかりと捉えた主体的な学びを目指さなくてはならないと考えています。

対話的については、理科のアンケートから「自分の考えをま



横田 聡先生

「主体的・対話的で深い学び」を得るための取組

とめたり、発表したりしていませんか。」の項目はポイントが低いことから、自分で考えたり、得たりすることばかりでなく、グループでの話し合いの中で新たに得た知識も自分のものだと実感させることが必要だと考えています。そこで、個人的にいろいろ手段を使って得た知識をもとに、一人では解決できない事を協力して、課題を解決していくことできるようにするために対話的な学びが必要と捉えています。

深い学びに関しては、先ほど述べたように浅い学びの部分形式ではなく生徒自身のためになる学びだと捉えています。

司会

次に、主体的・対話的で深い学びを得るための学校の取組概要を、またその実態などお話しただきたいのですが、その取組を充実するための体制づくりを含めてお話しください。

田邊

学力向上については、本年度は国語科の指導を中核として取り組んでおります。具体的には、「自分の考えを自分の言葉で、わかりやすく表現し、伝え合おうとする児童」や「学ぶ楽



田邊佳代先生

しさや達成感を味わい、主体的に学習に取り組む児童」の育成を目指すことにしました。そして、校内の研究課題を、「主体的に学び合い、自己有用感を味わえる国語科の授業の在り方」と設定し、「読む」「書く」指導における言語活動の充実を通して、確かな学力の習得に努めています。本校は自信のない子の割合が多いので、自己有用感を高めることを学校のテーマとして取り組んでいます。自己有用感を高めるための自主的・主体的に学ぶには、核となることは学級経営と捉えています。具体的には、国語では、友達に自分の考えを聞いてもらえる、自分を受け入れてもらえるという授業形態の工夫を行っていません。算数では、少人数加配の教員によるTTの授業を三年生以上で進め、個に応じた指導を実施しています。昨年度から公募型人事異動で理科専科の教員を配置して、児童の理科学習への意欲を向上させることを行っています。三年生以上全クラス専科教員がT1で、担任T2

として授業を一緒に進めることで課題解決学習の形態の研修をしています。この成果は、県の学力診断のためのテストでの正答率の高さにも表れています。専門性はとても大切だと考え、六年生では教科担任制を一部で行い中学校への準備を行っています。体制ですが、全職員が、「チャレンジプラン(知)」「なかよしプラン(徳)」「元気プラン(体)」「連携プラン」の四つに分かれて取り組んでいます。本校は「協働」を合い言葉に効果的な学校経営を目指しています。

鈴木

学園で取り組んでいることは「九年間の学びを保障しよう」ということで、各教科で系統表が作られています。どういうことを学んで、どういう言葉を使つてというポイントが教員用と、児童生徒用どちらも準備されています。これをノートや教科書に貼って、時々確認しながら学習しています。学びのヒントシートとして「論理的に考える十の技」を下じきにまとめました。推理したり、分類したりするなどの深い学びにするとき活用しています。

ICTの効果的な活用やメタ認知をしっかりとすること、評価活用型思考の育成、対話による学びの深化というのが「竹園

スタイル」ということでまとめられていて、現在研究中です。月曜日の六時間目に子どもを残して「竹園スタイル」を意識した授業を学園内で公開して、分科会を開いて研修を行っています。小中の職員が交流することで、九年間のゴールの姿や、六年生までの指導の積み重ねを知ることができ、七年生からの指導に生かすということができています。

坪松

授業の流れを示すカードを各クラスに用意しています。課題、グループで、ペアで、個別に、復習の時間、予想を立てる、自立解決、練習、注意すること、振り返りといったカードを示すことで、生徒たちは今何をすべきなのかを把握することができ、授業の見通しがもてるように工夫しています。また、時計の掲示物を用意することで時間を意識して時間内で話し合いをまとめたり、考えを深めたりできるようにしています。家庭学習の進め方の中に、学習の約束、家庭学習の時間の目安などを明記し家庭学習に取り組むよう働きかけています。時間割の中に各教科ごとに週に一時間の教科部会の時間を設定して、授業の進捗の確認、情報交換、評価の検討、教材研究に当たっています。要請訪問を定期的に各

教科で行うようにしており、教科部員会の指導案検討や研究協議、授業の振り返りを行い積極的に授業改善に努めています。教科の先生のみを要請訪問にならないよう、短時間でも他教科の授業を参観するようにし、ペア学習やグループ学習、課題のもち方など工夫などを学び合うようにすることで、主体的対話的深い学びをつなげるよう研修を進めています。

横田

本校は「生徒一人一人の思考力・判断力・表現力を高める学習の在り方」をテーマにして研究に取り組んでいます。教員にとつたアンケートを分析すると、「生徒は学習に対する興味関心は高い」「素直で明るい」という肯定的な意見が見られました。一方で「自己肯定感が低い」「体験不足」という課題が見られると意見がありました。この結果を受けて、「主体的・対話的で深い学び」を通して、自己有用感をもたせるような学習や、学ぶ意義や実生活への活用を取り入れた取組、体験的学習や問題解決学習を取り入れた取組を実践していきたいと考えています。

は、「単元を貫く学習課題を設定する」「授業の流れを確立する」の二本立てで目標に迫っていこうとしました。単元を貫く課題設定としては、例えば理科の「地球と宇宙」という単元においては、全体の学習をし終えた後に解決できるような課題として「火星に移住した際にみんなはどんな生活を送ることになるだろうか」を単元のはじめに設定し、既習事項をもとに単元の終末に課題解決のための有意義な話し合いをもつことができました。また国語科では、松尾芭蕉が鹿嶋に来た時に句を詠んだことを伝えて、「鹿嶋市紀行旅マップ」を単元の最後につくろうという学習課題を設定して取り組みました。このように何のために学習しているのかを見通しをもたせることにより意欲的に学習に取り組めるように課題を工夫してきました。授業の流れでは、つかむ、考える、深める、まとめる、振り返るといったことを生徒が司会をして行ってきました。生徒が司会をする中で、子供たち自身が時間の流れを把握して取り組みたり、意見が活発に出たりするという効果が現れました。自力解決のパーソナルワーク、四人を基本としたグループワーク、クラスワークという手順を踏んで対話的に学び自力解決ができ

るようにしました。クラスで問題解決していく学習形態の工夫や、月一度の焦点授業を行い授業参観、市で公開している授業改善プロジェクトの授業参観といった取組を行っています。

湖口

本校は小規模中学校で、教科は一人しかいません。研修の機会を得るために大子町の教育委員会が各校の計画訪問を自由に参加できるようにしています。本校では「授業のおもしろさ」という言葉で授業の生徒の学習への推進力にしようとしています。今年から三年計画で町の研究指定を受けてこの「授業のおもしろさ」ということで研究を進めていきます。その中で、今年度は課題づくりと導入時の提示の仕方を中心に取り組んでいます。

組織は、子供の深い学び、教師は深い研修をするために主体的で対話的で深い研修を校長のリーダーシップのもと行っています。生徒を外に出すことで、何にでも挑戦しようとする心を育てようということが本年度のテーマですので、多くの関係機関と連携しています。その中で、筑波大とも連携をしています。また、今年からは日体大とも連携をはじめました。昨年度は、県北アートの関係もあり、東京芸大とも連携をしてい

ました。様々な行事には積極的に参加して、学生、大学院生、教授、準教授を学校に招いてフィールドワーク、アート作品づくりを長期的につくって交流を深めて子供たちの「やった」「できた」「飾ってもらえた」という体験を通して自己有用感や肯定感を高め、来年もやってみたいという子供たちの思いを盛り上げようとしています。小規模校の強みは、すぐに動かせるといふことです。小学校のよりに縦割りという組織を生徒会の中に作っています。学校行事、連携事業の交流、町の行事への参加をこの組織を使つて、子供主体で教師ができるだけ手を出さないで活動して子供たちは自己有用感を高めています。郷土検定に三年連続で出場・来年のインタラクティブフォーラムに町代表六名全員が県大会に出場しようとする子供たちの思いを育てています。

司会

子供たちがわくわくする取組が成されているのだと感じました。「おもしろさ」というテーマで意欲的に取り組んでいる様子が見えるようなお話でした。大学との連携ついて具体的な内容をいくつかお話していただきたいのですが。

湖口

筑波大とは七年くらい交流し

ています。町教育委員会の連携に参加してのことですが、委員会が特別支援、道徳、算数・数学、理科などの授業を筑波大附属小中の先生に授業を依頼して研究授業をし、研究協議をします。大学院生が来る場合は、主にフィールドワークを行つてもらいます。四校の中学校をローテーションしてもらい、各地区のフィールドワークを朝から帰りまで丸一日してもらっています。日体大は連携したばかりなのですが、来年は集団行動に取り組んでもらう予定です。去年は東京芸大の方に、県北アートの作品づくりをしていただきました。できた作品は展示していただき、他の人の目にふれて感想を書いていただきました。その中でまたやりたいという生徒の気持ちが高まりました。

坪松

本校は、全クラスに天井にプロジェクトがついており、黒板がホワイトボードになっています。そこで、導入の部分で主体的になるということから、英語科、社会科は授業において積極的にデジタル教科書を使っています。ICT活用としては、タブレットがクラス四十台ありまして、理科の授業などではグループごとに一人一人がまとめたものをすり合わせて発表することに利用しています。タブ

子供・教師の変容、外部からの意見

司会

レットを積極的に利用して対話的な授業を行っています。子供たちは、機器の使い方をすぐに覚えて使いこなしています。どの教師も機器を活用できるような研修をしていこうとしています。

これまでの取組の中で子供や教師の変容、また外部からの意見などがあれば紹介してください。

田邊

子供の変容ですが、廊下に言語コーナーを設けて並行読書ができるようにした結果、読む本のジャンルが広くなり、冊数も増えていきました。また繰り返し書くことで、書くことに関して苦手意識が減ってきている学年が出てきています。高学年の話し合い活動では、自然に子供たちの方から、話し合いの中心になる児童が出てきて、活発に話し合い活動が行われるようになってきています。理科では、授業以外でも興味のあることを自分で調べてくる児童が増えてきました。教師の変容では、児童が「分かった・できた」となるような授業になるように意識するようになりました。児童の

鈴木

発言・つぶやきをよく聴くようになったこと、授業の相互参観をして互いに刺激を受けています。一番変わったのは、ICTをよく活用するようになったことです。外部の意見としては、学校評価アンケートから、「お子さんは、授業が分かりやすいと言っている。」の問いに九割以上が「はい」と答えています。学校評議委員の方からは、児童の元気のよさや素直なところ、落ち着いた授業態度がよいという評価を受けています。

子供たちが「なんで」と思うことが増えてきて、授業終了後も質問にくることが多くなりました。それに伴って、家庭学習の形態を変えてみました。ドリル学習から、学びノートを作つて疑問に思ったことを家で調べてみようということ今年度から始めています。五・六年生では簡単な論文の書き方というものを提示しています。教員は、小中の交流をすることで、成長の系統性を意識できるようにになりました。対話的という面では、児童との対話の中で切り返しを意識して練り上げをするようになりました。

坪松

各教科でペアやグループ活動を積極的に取り入れるようになったことで、話し合い活動が活

横田

意識の変化があつて、結果、子供たちの対話が生まれてきています。外部の意見では、学校評議委員の方から、生徒教師ともに真剣に授業に取り組んでいるという評価をいただいています。単元を貫く学習課題を工夫することや、生徒司会をすることで、見通しをもって学習に取り組めるようになってきています。また学習形態を工夫することで、自分の考えを広げ、深めることができていると考えてい

ます。教師の変容については、生徒の実態を確認しながら学習課題を設定するようになってきています。また、学習形態の工夫や生徒司会を取り入れていることで、机間指導の際に細かく指導ができるようになってきています。外部からの意見では、個に応じた指導をしているという点で、肯定的な意見がありました。学校運営連絡協議会の際の公開授業では、課題・学習形態・発問の工夫がされていると評価していただきました。

授業の改善・充実を図っていく中での課題

司会

今後「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた改善と充実に向けて実践していく中でどのような課題があると考えますか。また、それを克服するためにはどのような取組を考えているかお話しいただきたいと思えます。

湖口

課題となるものは、進路です。初めての試みを一齐にやっているわけですから、これで本当に実力がついて希望する進路へ進めるか心配しています。また、授業を時間内に終わらせようとして、しゃべりすぎ、仕切りすぎ、まとめすぎという授業

に戻ってしまうのではないかと、「ああ分かった」という概念的な部分が増えつつあるのではないかと不安があります。

そのために、先ほど坪松先生から出た授業の流れを全職員で、どの教科も授業スタイルを同じにしていくことと、今年度のテーマ「おもしろさを加える」と工夫できるという気がしています。

鈴木

いろいろなことに注意がいつてしまうお子さん、落ち着かないお子さんがいて、そういった子供たちが一緒に授業をとくとなかなか難しいところがあります。全体で取り組まなければいけないのは、ユニバーサルデザインで、視覚からも聴覚からもどちらからでもアプローチできるように授業を作り上げる形で誰もが充実できるような取組をしています。特別支援学級の先生に講話をしていただいて、こうすれば教室の中の居心地がよくなるというお話などをしていただきました。一番は、笑顔

田邊

本校の課題は、児童の自己肯定感の低さ、あと職員全体で同じ気持ちで向かっていけるような研修をやっていく必要があると思えます。若手教員の先生

は、経験が不足している分自信もないでしょうし、研修をやっていくことで児童の自己肯定感も高まっていくと思います。若手教員のよさを生かして、ベテランの先生も苦手なところはあ

また、機初小スタイルという、学習のきまりのようなものがあるのですが、誰もが、子供も教師も、この学校ではこうすればよいのだということが分かるようなスタイルの確立をここ数年やっているとあります。

坪松

先ほど学力診断のためのテストの話もしましたが、全体的には学力が上がっているということが見受けられますが、やはり理由や根拠を説明する問題の正答率が低い傾向にあることが課題です。また、「主体的・対話的・深い学び」をしているときの評価ですが、どうしても積極的な態度や様子で、関心・意欲・態度でしか評価できない。そうになると、他の子と比べる相対評価になりがちで、絶対評価としてのどこまで到達すれば優れているかなどの絶対評価の観点としての確立はできていません。そこで、各教科としての評価基準が大切になってくると思

横田

また、積極的に対話できる子供も増えてはきてはいますが、聞いているだけの子供も一部はいますので、全員が主体的・対話的・深い学びになるような授業展開をしていくことが今後の課題です。校内研修等で深めていきたいと思えます。

司会

座談会を終えて

各地区で取組は違いますが、子供たちがどういう力を付けるかというところは同じで、とても参考になりました。これからどう進めていくかということで、学校だけではなく地域にも広めてほしいと思います。改訂へ向けてしっかりと研修を進めて子供たちを育てていきたいと思えます。





新会員2年次研修

平成29年8月17日(木)、18日(金)

教育プラザいばらき

新会員2年次研修に参加して

高萩市立秋山小学校

國井 郁

去る八月十八日に「新会員2年次研修」が開催され、県内の2年次の先生方が地域ブロックごとに集まり、参加しました。

全体会では、教育センターの概要と、前茨城県教育研究会副会長・前神栖市息栖小学校校長の立野健二先生から「教員生活を楽しむ方法」についてご講話をいただきました。「楽しくなるまでやる。」立野先生がユーモアたっぷりに生き生きとお話される姿を拝見して、私もこの仕事に誇りをもつとともに、周りの先生方への感謝の気持ちを忘れずに、前向きに日々の実践に取り組みたいと思いました。

分散会では、日立市立助川小学校の鈴木総一郎先生より、きめ細やかな学習指導や子供たちとの信頼関係作りの実践についての発表を伺いました。授業時間や休み時間といった、それぞれの時間の中で、ねらいをもって子供たちへの理解を深めたり、伸びを見取ろうとしたりなさっていて、一日の時間を大切にする姿勢は、大変参考になりました。

続くグループ協議では、久しぶりに同期の先生方が集まり、それぞれの実践や課題について話し合



教師としての自覚を新たに

小美玉市立竹原小学校

飯村 真理奈

教員生活がスタートしてから、二度目の夏休みを迎えました。子供たちのパワーに負けないように、力一杯駆け抜けた二年目の自分を、少しだけ懐かしく感じます。同時に、支えてくださった先輩の先生方や同期の先生たちへの大きな感謝の気持ちが溢れてきます。

私は、八月十八日に行われた「新会員2年次研修」に参加しました。全体会の講話では、前茨城県教育研究会副会長の檜村先生から、「未来ある先生方へ」という演題で、今ある環境が自分を育てることや、一人だけで向き合うのではなく、チームで取り組んでいくことの大切さなど、ご経験を踏まえた言葉の数々が心に強く残りました。

いました。同期の先生方と話をすることができたことで、悩みを抱えているのは一人ではないと感じほっとしたとともに、具体的な指導のヒントを得られて、二期への活力を得ることができました。仲間同士実践を共有し話し合うことは、自分の課題を再認識し、指導の方法の幅を広げる貴重な場であると本研修を通して改めて感じました。今回学んだことを今後の学習指導や学級経営に生かすとともに、自ら学び続ける姿勢を持ち、よりよい教育実践に向けて精進していきたいと思えます。

一人の人間として自分らしさを忘れないことが、教師という職業を豊かに楽しむために必要であると気付きました。「教育は人なり」という言葉が表しているように、人が人を育てていく学校では、一人一人の人間性が、互いの成長に大きく関わってくると思えます。子供たちだけでなく、教師もまた、多様な経験を積み、自らの人間性を磨いていくことで、教育の質を高めていくのだと改めて思



いました。分散会・グループ協議では、先生方が日々取り組んでいる学級経営の事例を聞き、大変刺激を受けました。私が抱えていた悩みや不安は、他の先生も抱えているものであると知り、意見交換を通して、目の前の子供たちと向き合い、試行錯誤をしながら粘り強く学級経営に取り組んでいこうと、決意を新たにすることができました。同じグループの先生方には、親身になって話を聞いていただき、大きな力をもらいました。そんな仲間と出会えたことに感謝しています。

研修を終えた今、自分の持ち味を生かしながら、子供と共に歩む教師でありたいと心に誓いました。



「今」を大切に

ひたちなか市立阿字ヶ浦中学校

陶 泰行

去る八月十八日、教育プラザいばらきで新会員二年次研修が行われました。全体会と分散会の二部構成で、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

全体会では、櫻村毅先生の講話を拝聴しました。その中で非常に印象的だったのが、「何を目標として過ごすのか」という話でした。教師として、どのくらいの年代のときに、何ができるようになっていけばいいのか。そして今、自分は何に力を入れていきたいのか。長期的な目標を見据え、現在の自分を振り返ることの大切さを教えていただきました。これまで私は一日一日をただ過ごしてただけで、明確な目標をもっていなかったように思います。これからはゴールや目標を具体的にイメージして、

頑張っていこうと思います。分散会では、代表者の発表とグループ協議が行われました。発表者はひたちなか市立勝田第三中学校の藤田優希先生でした。本時の課題や活動内容の明確化など、同じ国語の教員として参考にしたい内容が多く、非常に参考になりました。

グループ協議では、二年次の先生方と、自分のもつ悩みや教育課題について話し合いました。昨年と違い、今年度はある程度学校の流れが分かり、見通しをもつことができます。そのため、悩みやその解決に向けた手立てがよりはっきりしたものになっていたと感じました。

最後に、那珂市立菅谷東小学校の小室信之校長先生から「若さは武器である」というお話をいただきました。二十代の今しか、できないことがあるのだらうと思いません。同じ時間を共有できる同期の先生方とこれからの助け合いながら、今自分ができることを模索し続けたいと思います。まずは、三学年分の国語を学べる今の環境を生かし、教科教育に力を入れていきたいです。

二年次研修に参加して

石岡市立府中小学校

黒木 智子

八月十八日、新会員二年次研修会に参加させていただきました。栄養教諭である私は、日頃職種の異なる先生方と同じ研修を受ける

機会が少ないため、今回の研修は普段とは違った視点での学びを多く得ることができました。

全体会では、前茨城県教育研究会副会長の高田和信先生の講話を拝聴させていただきました。高田先生の講話の中で「子供のつまずきは教師自身のつまずき」という言葉がとても印象に残りました。

食に関する授業において、子供のつまずきを私自身のつまずきとして捉え、教材研究や指導方法の見直しをするなど、これからの研鑽を積んでいきたいと感じました。

分散会では、石岡市立杉並小学校の筑井渉先生の発表を聞かせていただきました。学級経営において子供に考えさせる工夫や、学習指導において本時の課題が子供たち自身の課題になるような工夫など、とても勉強になりました。

グループ協議では、同じグループの先生方と日頃の悩みや課題などについて話し合いました。職種は異なっても教員として同じような悩みをもつ仲間がいるという安心感や「子供たちのために」という気持ちちは同じであるという気付きを得ることができました。また、子供たちとの関わり方や指導方法など同期である先生方の取組に対し刺激を受け、私もより一層頑張ろうという強い気持ちをもつことができました。さらに、他校の先生方の給食指導に対しての思いや考えも知ることができ、とても勉

強になりました。

子供たちの心身の健康を食の面から支えていけるよう、今回の研修で学んだことを今後の教育活動にいかしていきたいと思えます。また、常に学び続ける姿勢を忘れずに、これからも教育活動の充実に努めていきます。

二年次研修を通して

古河市立下辺見小学校

岡田 麗

採用されて、二年目もすでに五か月が経とうとしています。養護教諭は一人職ではありますが、本校の先生方や近隣の養護教諭の先生方がとても優しく、手助けをしてくださるので、今日まで過ごすことができました。まだまだ未熟ではありますが、ここまで成長できたのも周りの先生方の多くの手助けがあったからだと感じています。

八月十七日に、教育プラザいばらきで新会員二年次研修がありました。「若い教員に望むこと」として、前筑西市立下館中学校長の佐藤和男先生のご講話をいただきました。ご自分の新採時代や教員生活を振り返ったお話から「TTP(徹底的にバクる)」という言葉が印象的でした。ただまねをするとは簡単にできるが、徹底的にまねをするというのは自己研鑽している人しかできないとおっしゃっていました。養護教諭の二年次研修は、近隣の養護教諭の指導を受



けることになっていたので、その際には、まず自己研鑽に励み「TTP」できるようにしたいです。また、若い教員にとつて強みである「熱意と明るさ」を忘れずに子供たちと関わっていききたいです。

グループ協議では、今の悩みや課題について話し合いました。私たちのグループは、養護教諭と栄養教諭で構成され、一人職ということでも互いに共感することが多くありました。悩みや課題について共有することで、心が軽くなったように感じました。また、自分の課題についても同じ職種の立場から適切なアドバイスをいただくこともでき、これからの教育活動に活かしていきたいと思えました。

最後になりますが、このような研修会を開いていただけること、たいへんありがたいと思います。受け身ではなく、常に学ぶ姿勢を忘れず、精進していきたいです。

実践研究

北 県 「聴き合い学び合う、 夢中になって学ぶ授業づくり」 主体的・対話的で深い学びの 実現に向けた校内研修を通して」 常陸太田市立久米小学校

一 はじめに

新学習指導要領への改訂に向けて、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりが求められている。本校は、学年・学級の中規模校であり、経験豊かな教師が多い。しかし、県の学力診断のためのテストの結果や全国学力学習状況調査の結果を考察すると、基礎的・基本的な事項については理解しているが、「思考・判断・表現」等のいわゆる深く学ぶ力が不十分であった。

そこで、本校では児童一人一人が深く学ぶ力を身に付けるために、「聴き合い学び合う、夢中になって学ぶ授業づくり」をテーマとした校内授業研修を充実してきた。その実践概要を紹介したい。

二 研究の目的

児童一人一人が「聴き合い学び合う、夢中になって学ぶ授業」を行うために、平成二十八年度からの校内授業研修を通して、次の二点を究明することを研究の目的とした。

(一) 「聴き合い学び合う、夢中になつて学ぶ授業づくり」における、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた理論及び校内研

究の目的とした。

修の在り方について検討する。

(二) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた実践研究による授業の在り方について検討する。

三 研究の内容・方法

(一) 授業づくりにおける基本的な考え方

本校では研究テーマに基づいた授業づくりを進める上で次の理論をもとに研究を進めた。

ア 協働的に学び合うためには、話し合いや教え合いではなく、個々の学びに基づいた「聴き合え



る」関係が重要である。具体的にはわからないことを「わからない」と安心して聴ける学級づく

くりを行った。授業の中での安心感、対話的な学びから、深める学びへつながる重要な要素である。「聴き合える」授業づくりを進めるために、コの字型の座席配置やグループ学習、ペア学習を効果的に用いた。

イ「夢中で学ぶ」ことは、主体的に学ぶことの本質であり、「一人一人に対する学びの保障」にもつながる。そのため、児童が自ら進んで興味をもてるようなやや難しい質の高い課題を準備することを含め、教材もつ本質的な意味について教師が研究し授業に対して準備するようにした。また、導入の時間の短縮をはじめとした児童自らが考える時間の確保を行った。

(二) 校内研修と授業協議会

研究のねらいに迫るために個人だけではなく、全職員で取り組む校内授業研修を目指した。その具体的取組は次のとおりである。

ア 全職員による授業公開

特定の教科に関わらずに、どの教科においても授業づくりが大切であるとの視点から、全教科における授業づくりを研修の基本とし、全職員が開かれた研究授業を行った。また、教師一人一人が主体的な研修ができるように小グループによる研修として、低中高のブロック研修を進めた。もちろん、授業づくりのための研修以外にも、多様な研修

「聴き合い学び合う、夢中になって学ぶ授業づくり」
常陸太田市立久米小学校

【テーマの検討理由とねらい】
「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、児童一人一人が深く学ぶ力を身に付けるために、平成二十八年度からの校内授業研修を通して、次の二点を究明することを研究の目的とした。

【全ての児童が安心して夢中になって学ぶ授業づくり】
◎ 児童一人一人の学びの保障を確保する。
◎ 主体的・対話的で深い学びを実現するために、児童一人一人が自ら進んで興味をもてるようなやや難しい質の高い課題を準備することを含め、教材もつ本質的な意味について教師が研究し授業に対して準備するようにした。

【学びのデザイン】
◎ 主体的・対話的で深い学びを実現するために、児童一人一人が自ら進んで興味をもてるようなやや難しい質の高い課題を準備することを含め、教材もつ本質的な意味について教師が研究し授業に対して準備するようにした。

【授業の3つの特徴】
◎ 主体的・対話的で深い学びを実現するために、児童一人一人が自ら進んで興味をもてるようなやや難しい質の高い課題を準備することを含め、教材もつ本質的な意味について教師が研究し授業に対して準備するようにした。



ウ 全体研修

全体研修では外部講師を招聘し「公開校内授業研修会」として、全職員参加のもと実施した。参観した提案授業を通して、児童一人一人の学びの事実から協議し、講師の指導を含めて校内研修の方向性を再確認する研修でもある。

具体的な研修の方法としては、児童一人一人の学びの事実を明確にするため、授業のビデオを視聴する。そして、少人数のグループで話し合い、全体で共有する。ビデオを視聴しながら、児童名をあげていねいに協議する。児童の様子をつぶさに振り返ることで、授業の本質

がわかるようにした。ブロック研修による授業公開では、ブロック所属の教師全員が授業参観し、また、授業の全てをビデオに撮影して、放課後実施される授業協議会に生かすようにした。ブロック以外の教師も積極的に研修会に参加し、低学年の授業を高学年担当が参観することもあった。

を協議できるようにした。
また、外部からの参加者にも授業参観だけではなく授業協議会に参加してもらうことで、客観的に本校の授業づくりや研修について意見を頂いた。



四 研究の成果と課題

研究の成果として、「聴き合い学び合う、夢中になって学ぶ授業づくり」について研究し、次のような結果を得ることができ、今後の実践に生かせるものと考ええる。

まず、県学力診断のためのテストの結果によると、算数や社会科における思考を深めて考える問題の正答率が向上した。その理由として、一年間主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりをいねいに行い、一人一人が聴き合い学び合う、夢中になって学ぶ授業づくりを進めてきた成果の一つと推察する。

また、授業に対する意識のアンケートでは、「話し合う活動を通して、考えを深めたり広めたりできる」について意識の高まりが見られた。また、「わからないことを友達

にきく」と答えた児童が、一年間で三十七％から六十％へ大きく向上した。これは、協働的な学習を通して友達との対話が進み、学ぶことの楽しさや友達に聴いて「わかった」という感覚を児童が体得しているからであると推察する。

さらに、少人数によるブロック研修を行うことで以下のような成果も得られた。

授業について少人数で協議したことから、児童の名前を出しながら一人一人の学びの事実に基づいて具体的に話し合い、授業づくりについての意義を深めることができた。職員にとっても自由に意見を述べたり他の職員の意見を聞いたりすることは自己の授業づくりを深めるために大変重要である。

全体研修においては、広く授業を公開し外部の参加者にも授業協議会に参加していただいたことで、本校の授業づくりに対する客観的な意見を聴くことができた。全体研修においても少人数のグループ協議の時間を設定し、自由に対話する機会を設けたことは、授業づくりへの意欲を高めるために有効であった。

課題としては、授業づくりの基本を押さえながら、さらに、教材の特質を的確に捉えた課題の設定や展開の工夫をすることである。また、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための質の高い学びにつながる授業研究を、教科、単元に応じて検討する必要がある。

東 県

科学的な見方・考え方を養う

理科学習の在り方

問題解決の過程を意識し、思考力・表現力を充実する学習活動を通して

銚田市立銚田小学校

一 はじめに

本校は銚田市の高台に位置し、児童数三百五十九人、学級数十六学級（特別支援四）の中規模校である。本校の教育目標は、「ほんきに考え こころ美しく たくましい ほこたの子」として、知・徳・体のバランスの取れた学力を備えた児童の育成に努めている。

昨年度「科学技術分野の文部科学大臣表彰 創意工夫成功労学校賞」（全国の小中学校から二十校）と「子どもの読書活動優秀実践校の文部科学大臣表彰」（全国の小学校から七十九校）の二つの文部科学大臣表彰を受賞した。

本校は、平成二十四年度から理科の教科担任制の指定を受け、理科教育の充実に取り組んできた。その研究実践の概要を紹介する。

二 主題設定の理由

本校の児童は、理科学習への関心が高く、自然の事物・現象に関わる体験活動や観察、実験などを行うことについて意欲的である。

また、自分の言葉でまとめようという意識しており、理科の学び方が定着しつつある。しかし、考察の場面では、結果と考察の区別ができ

ない、理科の用語や表現が適切でない、進んで発表することに抵抗がある、考察が共有化や公認されるには十分ではない等の課題が挙げられる。さらに、学習を振り返り、自然の事物・現象や日常生活との関連を図る働きかけの場面や時間が少ないのが現状である。また、「教育課程理科ワーキンググループ（第八回）配付資料」において「理科におけるアクティブ・ラーニングの三つの視点からの不

断の授業改善については、「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」の三つの視点が提示された。この視点で本校の理科授業を見直し、改善に向けて取り組みたいと考えた。そこで、①「深い学び」では、「自然の事物・現象について理科における見方・考え方をを用いて探究の過程を通して学ぶことにより資質・能力を獲得する」とともに、学習を振り返って変容を自覚したり表現したりする場面を必要に応じて設けること、②「対話的な学び」では、考察・推論する場面などであらかじめ個人で考え、互いに意見交換したり、議論したりして自分の考え

をより妥当なものにする場面を設けること、③「主体的な学び」では、獲得した知識・技能をもとに新たな視点で自然の事物・現象を把握したりする学習場面を設けることに重点をしばらくこれらの場面の充実を図り、科学的な見方・考え方を養っていきたいと考え本主題を設定した。

三 研究のねらい

問題解決の過程を意識して言語活動を効果的に取り入れることにより、科学的な思考力や表現力を高める指導の在り方を究明する。また、実際の自然の事物・現象や日常生活を関連付けることで実感の伴った理解を図り、科学的な見方や考え方を養う。

四 研究の仮説

(一)仮説1について
問題解決の過程を意識して学習活動を充実させることにより、問題解決の能力が育ち、科学的な見方・考え方を育てることができるであろう。

(二)仮説2について
理科の内容と実際の自然の事物・現象や日常生活を関連付けて考察させることにより、深い学びになるとともに理科を学ぶ意義や有用性を高め、科学的な見方・考え方を養うことができるであろう。

(三)仮説3について

二人体制で行う理科の授業を工夫改善し、T T による指

導を充実させることにより、理科の学び方が身に付き、科学的な見方・考え方を養うことができるであろう。

五 研究の内容

(一) 仮説1 ～問題解決の過程を意識した指導～

①板書の工夫とノートの活用
問題解決の過程が見えるように板書の構成を工夫した。

「ノートの書き方の見本」をノートの表紙裏に貼り、これをもとに見開きで書かせ、記述の仕方を工夫させた。問題解決の学習の流れや実験観察の前後の思考の変化を児童自身に見えるようにした。

②予想の顕在化

各自が問題に向かい合う時間を設け、予想や仮説とその理由や根拠をノートに記述させた。その際、既有的知識や既習事項、体験を基に考えるように助言した。そして、予想を挙手にて確認し、理由や根拠を発表させて顕在化を図った。この活動を通して問題意識させながら見通しをもつて、実験や観察に取り組みることができるようにした。

③実験、観察及び考察と交流の工夫

データを集める実験は、再現性を意識して複数回行うように働きかけた。また、複数のグループで行うことによ

り、データを共有するとともに比較検討に生かせるようにした。さらに、黒板に掲示することで傾向や共通性を見やすくした。

グループごとに検証方法が異なる場合には、まず、方法と観察、実験の結果を図や表に整理させた。次に、結果から考えたことや推論したことを図や絵、文を用いて表現させた。さらに、相手を意識して、分かりやすく伝えられるようにした。さらに、結果や考察を共有する場を設け、話し合いを通して全体へと広げられるようにした。

考察を交流する際は、グループの考えを発表したり、全体の傾向や共通性を話し合ったりした。このことにより、他のグループの結果や考察を比較検討して、客観性のある結論を導き出せるようにした。そして、個人、グループ、全体と交流してまとめにな

(二) 仮説2 ～学習内容と自然の事物・現象や日常生活の関連～

①自然現象・日常生活との関連
職員全体で学習内容の見直しを行い、単元ごとに自然の事物・現象や日常生活の関連を洗い出し、関連表を作成した。関連表を活用して導入の

場面や広げる・生かす場面で、学習内容と結び付けることができるように働きかけるようにした。

(三) 仮説3 ～T Tの連携～

①T Tの役割分担と連携

問題解決の流れに沿って学習全体を連携しながら指導した。技能面は理科専科が、実験の注意点、器具の使い方、記録のしかたなどを中心になつて話した。話し合い活動では担任が中心になり、児童の実態に応じて指名をして話し合いが進められるようにした。実験や観察では、二人とも関わり合いながら支援を行つた。また、板書は板書計画を基に問題解決の過程に沿って二人がスイッチして行つた。

さらに、活動への取組、ノートの記述、発言、つぶやきなどの児童の情報を共有し、連携して働きかけ、学習効果があがるようにした。

②打ち合わせの工夫

授業の前後で目的をもつた打ち合わせを行った。授業前には、学習の流れに沿ったT Tの役割、学習場所、実験や器具の扱い方を確認するとともに支援の必要な児童について支援のしかたを共通で把握しておいた。授業後には、児童の様子、表現の妥当性、具体的な評価について話し合

い、情報を共有した。

③理科室の環境の工夫
「理科の学び方」「理科室の使い方」「予想・結果・考察の書き方」などの理科室の掲示物を工夫し、理科の学び方のポイントを指導するようにした。特に、予想とその理由・根拠や考察の書き方は、掲示物を使用して発達段階に応じて指導した。

六 研究の成果

①仮説から

板書とノートの書き方を工夫したことで、教師も児童も問題解決の過程を意識することができた。どこに何を書くのかを明確にしたことで、概念が形成されていく様子が分かるようになり、科学的な見方や考え方を養う手立てになった。

個↓グループ↓全体と交流を工夫したことで、書いたり話したりしながら伝え合い、児童の表現力が身についた。

「予想・仮説」と「考察」が比較しやすく根拠を明確にした記述が多くなった。振り返りには、予想との違いや初めて分かった発見として記述することが多くなった。教師は、児童の思考の流れや変容を見取り、指導と評価に生かすことができた。単元計画表やタイムプロットカードの活

用により何をどのように学ぶかを見通すことができ、児童の学習に対する主体性が身に付いた。

②諸テストの結果から

県学力診断のためのテストで五年間、県平均を上回る。全国学力・学習状況調査(平成二十七年)で、国や県平均を上回る。

③理科や科学への関心の高まり
科学研究作品展の作品づくりが年々増加している。平成二十八年度は、百一点と過去最高の作品数となった。小学校作品の割合として、市展の三十四%、地区展の十一%、地区展から県展への出品の二十六%を本校の作品が占めた。

七 今後の課題

学習を振り返る時間を充実させて主体的な学びにつないでいきたい。また、獲得した知識・技能と自然の事物・現象や日常生活との関連を図る場面を充実させ、深い学びができるようにしていきたい。

西 県

自ら学び、考え、表現する力を身に付けた児童の育成

—算数科における伝え合い、学び合いと学習環境の工夫を通して—
常総市立大花羽小学校

一 はじめに

今年で創立百二十八年目を迎えた本校は、常総市を流れる鬼怒川の西側に位置する。児童数六十八名の小規模校である。明るく素直な児童が多く、生き生きと活動することが出来る。一方で、本校の教育目標は「自ら学び 心豊かで たくましく 未来に羽ばたく 子供の育成」であるが、児童の実態を見ると、自分の考えを実現することが苦手で、発表に消極的な児童がおり、学力の差も大きくなってきている。

これらの実態や新学習指導要領で求められている主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の考え方を基にした「言語活動」がより大切であると感じた。そこで、「算数科における伝え合い、学び合いと学習環境の工夫」をキーワードとし、自ら学び考え、表現する力を身に付けた児童を育てることをめざして実践研究を進めてきた。今回はこの三年間の実践研究の概要を紹介する。

二 研究のねらい

算数科の学習において、自ら学

び、考え、表現する力を身に付けた児童を育成するための、伝え合い、学び合う授業の展開と学習環境の工夫の在り方を究明する。

三 主題に迫るために

(一) 伝え合い、学び合いについて

児童が伝え合い・学び合う姿について次のように考える。

・自分の考えをもち、それを友達に伝える（ノートを見せながら話す）ことができること。

・学び合う姿については、自分の考えをもとに、友達の考えを解釈するために、比べたり、質問したり、付け加えたりして、「分かった」のゴールを目指して学ぶことができること。

① 花算歩について

花算歩の定義及び授業への位置付け

花算歩とは自分の席を離れ友達のノートを見たり、質問し合ったり学ぶ活動のことを指す。その形態については一人、ペア、個別指名などの形

態がある。花算歩を行うことで児童には表一のような変化が見られる。すなわち、「自分で動いて気付く時間」として花算歩を位置付けることで自力解決の手助けとなる。

花算歩

＊自分が動いて気付く時間
～だれもが主役～

- ・新しい考えに気付く
- ・自分の考えに自信が持てる
- ・自分の考えを深める
- ・自分の考えの間違いに気付く
- ・自分の考えの続きが分かる

イ花算歩の効果

自力解決の時間に花算歩を行うことで児童の理解度に応じて次のような効果が現れると考えられる。

○ 解き方が分からない児童

花算歩を行うことで解決方法が分からない児童が解決方法に気付いたり、どこでまちがえているのか気付いたりすることが出来る。

○ 途中で分かった児童

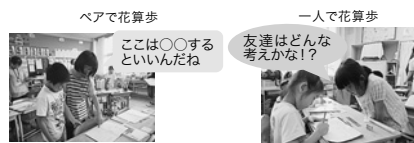
花算歩を行うことで、最後の解決方法のヒントを得たり、最後まで解けることができるようになる。

○ 最後まで解けていた児童

花算歩を行うことで、自分の考えを深めることができ。さらには、自分とは違った新しい考えに気付く、最初の方法とは別の方法で考えを

まとめようとする意欲が湧く。

○自力解決後の発表に向けて
花算歩を行うことで、自分の考えを確認し、自信をもって発表することができる。



2ステップ花算歩



② 他者説明について

算数的思考力・表現力を高める活動の一つに「他者説明」がある。これは「友達の考えを自分の言葉で表現する」活動である。他者説明を行うには、単に書いてあることを話すのではなく、内容をきちんと理解し、根拠をもつ

③ 振り返りについて

学習の最後に「振り返り」の時間を設けることにした。「振り返り」ではこの時間に理解したことだけでなく、花算歩や伝え合い・学び合いを通して感じたことを書きせるようにした。表二は振り返りの仕方を表した掲示物である。「友達から学んだこと」や「友達の考えのよいところ」などを文章記述させることでより深い学びと学習内容の定着を実現できるようにした。

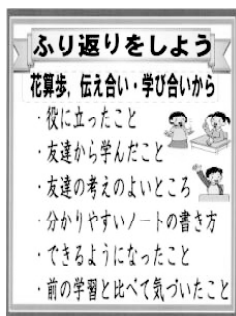


表2 振り返りのしかた



④ 学習環境の工夫について

算数的活動に親しむことができる算数コーナーを設置した。パズルなど児童の興味・関心を引く掲示物を作成し、「やってみよう」という意欲を高めたり、「できた」という達成感や成就感を味わいながら、日常的に遊びを通して思考力を高めることができるようにした。教室には、「花算歩」や「振り返り」について掲示した。また、校内ノート展を行うスペースを設け、良いノート作りの参考にできるようにした。

四 研究の成果

(一) 伝え合い、学び合う場面で、「花算歩」や「他者説明」、「振り返り」の活動を取り入

れたことにより、自ら学び、考え、表現する力が身に付いた。

(二) 学習環境において、算数コーナーを常設したことで算数に対する興味・関心が増してきた。また、学習形態を工夫することで、伝え合い、学び合う学習に積極的に取り組むようになり、自ら学び、考え、表現する力が身に付いた。

五 今後の課題

伝え合い、学び合う学習を充実させるためには、時間の確保や教材教具の工夫が重要である。十分な伝え合い、学び合う時間を確保するためにさらに教材・教具の工夫を図りたい。

自ら学び、考え、表現する力を様々な学習活動に生かせるように、学習環境の工夫について研究を継続していきたい。

算数科で取り入れた「花算歩」や「振り返り」の取組を他教科でも取り入れ、自ら学び、考え、表現する力の向上を目指していきたい。

教育プラザいばらぎ

事務局だより

茨城県教育センターは、本県教育の振興・充実を図るため、県内の全小中学校が加入する自主的な研究団体の活動を支援しています。センターがある「教育プラザいばらぎ」の建設、運営にご尽力いただいている諸先輩方や、小中学校の教職員の皆様から感謝申し上げます。

今年度も、理事長に就任いたしました。茨城県教育センターの円滑な運営に、事務局職員一丸となり、頑張つて参ります。よろしくお願いたします。

主幹 (研究会担当) 大内 雅司
 主事 (センター・研究会担当) 石島久美子
 主事 (学校長会・研究会担当) 砂押 有香

本年度も、理事長を中心とした事務局体制のもとに、会の発展のため努力して参ります。

会員の皆様のための各事業が円滑に遂行できるよう、茨城県教育センターの運営にさらに努力して参ります。

本年度から、理事長に就任いたしました。茨城県教育センターの円滑な運営に、事務局職員一丸となり、頑張つて参ります。よろしくお願いたします。

皆様方に当施設を快適にご利用していただくために、さらに工夫改善をしていきたいと思ひます。

学校長会主幹として三年目になります。本会の活動充実のため、精一杯頑張りたいと思ひます。

教育研究会担当二年目となりました。心身ともに成長して、会員の皆様のお役に立ちたいと思ひます。

- 茨城県教育センター職員
- 理事長 砂川 洋一
 - 局長 関 晃
 - 主幹 (センター担当) 長澤 洋子
 - 主幹 (学校長会担当) 坏 哲男

平成29年度教育プラザいばらぎ職員



後列左より 大内、砂押、長澤、石島
 前列左より 坏、砂川、関

関 晃

長澤 洋子

石島久美子

砂押 有香

坏 哲男

大内 雅司

視 点

授業の質的な改善を目指す

「思考力・判断力・表現力の育成」

河内町立みずほ小学校
教頭 豊嶋 正臣

本校は、全校児童百二十名、全学年単学級の小規模校である。また、今年度末、本校を含め町内全小学校が閉校し、来年度から町内一校の義務教育学校となる。閉校及び統合に向けての準備を進める中で、今、目の前にいる子供たちに未来を生き抜く力を付けるため授業の改善に取り組んでいる。これまで、週二回放課後、全教

員で指導に当たる算数の補充学習
みずほ小版学びの広場の実施など
により、児童の学力の向上につい
て量的な対策を図ってきた。今年
度は、これを継続するとともに、
質的な対策として、思考力・判断
力・表現力の育成を重点課題とし
て、授業改善に取り組んでいる。

その取組は大きく二つの柱からな
る。

一つ目は、全教員が年二回、同
僚に授業を公開することによる相
互研修である。それぞれの教員が
思考力・判断力・表現力の育成を
目指した授業を公開し、それを基
に、グループ協議、リフレクショ
ンを行うことで、職員相互に授業
力の向上を図ることはもちろん、
授業で子供たちをどう育てていき
たいかビジョンの共有を図り、同
僚性を高めている。

二つ目は、授業改善における P
D C A サイクルの確立のための論
文作成である。全教員が論文の作
成に取り組むことで、自己の授業
を振り返る機会とし、手立ての有
効性を検証することで、授業改善
を推進し、授業力の向上を図る。

学びの主体である子供の姿を基
に、子供に付いた力を語り合うこ

とで、一人残らず学びを保障する
授業づくりを進めていきたい。

校内授業研究会の充実

「対話と深さを求めて」

牛久市立中根小学校
校長 志賀 英人

本校では、「一人を大切に」じつ
くり「しっかり のびのび」と
教育目標を設定し、授業改善を教
育実践の基盤に据え、児童一人一
人のよさを伸ばす学校づくりを推
進している。研究推進委員会を軸
に授業改善の成果と課題を探り、
具体的努力事項を設定し、授業研
究に取り組んでいる。主体的・対話
的で深い学びの実現に向けては、
教師一人一人の学び続ける姿を大切
にしていきたい。

一 研究テーマ

「一人一人の学びを保障する学
習指導の在り方」

二 授業実践における努力事項

(一) 児童の思いを大切に

- ・自分の考えをもたせる。
- ・どんな発言も温かく受け止
め、最後まで聴く。
- ・教師の説明は簡潔に行う。
- ・分からなさに寄り添うことを

重視する。

(二) 授業者の思いを大切に

「この単元で、この課題で、こ
んな姿にしたい」という構想
をもって授業に臨む。

- ・児童の興味や考えを引き出す
工夫をして授業に臨む。
- ・児童の反応を予想して授業に
臨む。

(三) 支え合う学びを大切に

・小集団やペア活動を取り入
れ、様々な考えや疑問を出し
合い、児童の力で解決してい
く。「友達と学ぶって楽しい
な」支え合う安心感や充実感
の中で学習活動を展開して
いく。

・よく聴く教師から、学びをつ
なぎ、広げ、深める教師へレ
ベルアップしていく。

主体的・対話的で 深い学びの実現を目指して

潮来市立日の出中学校
校長 河嶋 賢一

本校では、今年度より三カ年計
画で、「主体的・対話的で深い学び
の実現」を目指して、校内研究に
取り組んでいる。今年度は「課題設

定と振り返りの工夫を通して」、

二年目は「対話的な学習活動の展
開の工夫を通して」を副題として
取り組み、三年目は二年間の成果
と課題を踏まえて、研究主題に迫
りたいと考えている。

一 校内研究スタイル

本校の校内研究は、一人一回の
研究授業公開を原則としている。
研究授業は、月曜日の六校時に行
っている。また、全体提案授業とし
て、一学期始めの研究授業を一学
級だけの公開とし、全職員で授業
を参観して、研究主題に迫るため
の理論や実践方法について共通理
解を図るようにしている。

二 リレー研究

授業参観後は、KJ法的手法を
用いたワークショップ型研究協議
を実施し、授業のねらいや手立て
について検証を行っている。本校
では「リレー研究」という校内研
究の特徴的な取組がある。研究協
議で明らかとなった課題を、次の
授業者が引き継ぎ、その課題の克
服を目指した授業を行う。これを
年間を通して繰り返すことで研究
主題に迫るようにしている。
今後、理論研修と研究授業に

全職員で計画的に取り組み、検証作業を繰り返して、「主体的・対話的で深い学びの実現」を目指していきたい。

「社会的・職業的自立に必要な態度や能力の育成」

～表現力を高める活動を～

通して、

高萩市立松岡中学校

校長 征矢 眞一

本校は、昨年度、社会的・職業的自立に必要な四つの「基礎的・汎用的能力」に生徒の実態を踏まえた「目指す生徒の姿」を設定し、知育・徳育・体育の三つのプロジェクトごとに具体的な教育活動を計画し、方法・目的等に「つながり」があることを生徒に意識させながら実践してきた。さらに各教科に共通する生徒の表現する力を育てる授業づくりのために、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の改善を図ってきた。

一 研究のねらい

表現力を高める活動を通して、生徒一人一人が社会的・職業的自立に必要な態度や能力を身に付けるキャリア教育の在り方を追求す

る。

二 研究の実際

(一) 表現力を高める活動を取り入れた授業実践

① 主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業及び授業参観の実施。

② 教員の授業力向上のための研修会の実施。

(二) 昨年度の生徒アンケートから各教科・領域の「つながり」の明確化の手立て

① 小テストや学習環境の工夫と家庭学習の充実のための働きかけ。

② 教科横断的な視点に立った関連表の作成。

三 取組の成果

表現力を高める活動を通して、生徒一人一人が社会的・職業的自立に必要な態度や能力を身に付けるキャリア教育の在り方を追求することができた。

「主体的に学び、確かな学力を身に付けていく子供の育成」

筑西市立竹島小学校

校長 佐藤 功夫

本校は、平成二十八・二十九年

度、筑西市教育委員会・筑西市教育研究会指定校として、算数科における言語活動の充実を図ることを通して、主体的に学習に取り組む、確かな学力を身に付けていく児童を育成するための算数科授業づくりについて研究を進めてきた。

一 研究の実際

(一) 各研究部の取組

① 授業研究部
・算数ノートの使い方の提示・活用

・発達の段階や既習内容に応じた「算数の言葉」の作成
・発表の手引き「めざせ！算数名人」の作成・活用

・指導内容に応じた適用問題の作成
② 環境整備部
・算数コーナーの設置

教室：児童のノートや既習事項等の掲示
廊下：算数クイズ等の掲示

③ 調査研究部
・算数の学習についての意識調査（年三回）

・調査結果の分析と考察
(二) 校内研修の実施

① 一学期

・全担任が授業公開
・外部講師（筑西市教育委員会）の招聘
・学習指導案の検討

② 二学期

・相互授業参観と事後検討会
二 筑西市教育委員会・筑西市教育研究会指定校発表会

平成二十九年十一月二十二日

主体的・対話的で深い学びの創造

～本校で挑戦していること～

小美玉市立玉里小学校

校長 額賀 博

本校は昨年度から、講師として福井大学大学院准教授、小林和雄先生、茨城学びの会から岩本泰則先生、根本光子先生を招聘し、主体的・対話的で深い学び（ディープ・アクティブ・ラーニング）の研修を続けてきた。具体的には、
○対話を成立させる「聴き合う関係」が教室にも職員室にも、学校と地域にも築くようにする。
○協同的学びによる授業を促進させるため、小グループの学びを推進する。

低学年においては、全体学習とペア学習で、三年以上では男女四人混合グループ「男女の位置がたすき掛けの位置」による協同的学びを中心に授業を組織する。
四人以下の小グループでは、どの子も学びに参加することを余儀なくされるので、この学びの強制機能は一人残らず学びを成立させる上で、極めて重要であり、主体的・対話的で深い学びを成立させるには必要不可欠である。そして、小グループの協同的学びが、

学力の低い子供の学力を回復する機能を発揮することができる。教師一人で複数の児童に対応しようとするのは時間がかかり、現実には不可能に近いが、小グループで協同的学びに参加することによって学力を回復できる。また、学力の高い子供にも協同的学びはより高い学力を保障することになる。高いレベルの課題は、クラス全体のレベルを上げることにつながる。子供は分かりそうで分からない問題に夢中になる。

○授業最後には振り返りを自分の言葉で書かせることで、B問題等の適応力がつく。

好文亭 一文芸欄



坂東市立七郷小学校

荒井 馨

水しぶき 青空にとび

はしゃぐ声

日暮らしの 声にせかさ

夏遊び

同 田沼 留美

坂東市立弓馬田小学校

菊池 裕子

木道の 影ふみつつの 吾亦紅

落ち葉はき 笑顔も集まる

大げやき

つくば市立竹園学園東中学校

片岡 浄

蝉もまた 議論に加わる 座談会

つくば市立竹園学園東小学校

諸田 裕子

返り梅雨 太陽まだかと

せみの声

同 岩瀬 朝絵

夏の夜に 蛍と花火 くらべっこ

同 川西 裕子

つかまえた きらめく星を

富士登山

つくば市立竹園学園西小学校

飯塚 隆志

夏休み 色とりどりに 咲く花が

早くおいでと 待つ学び舎よ

同 小室 雅信

受験生 やらない理由を

つくらない

同 大藤 一也

教室の 灯で照らし出す 桜かな

那珂市立菅谷東小学校

富山 和子

空蝉を そっと手にのせ 空仰ぐ

那珂市立芳野小学校

三田寺 将志

催涙雨 降らぬことを 願いつつ

二人見に行く 願いをのせて

那珂市立木崎小学校

山野 綾子

心弾み 娘と二人 初蛍

音消し歩く 日暮れのあぜ道

那珂市立第三中学校

小松崎 真未

緑化委員 花に水やり 虹作る

那珂市立菅谷東小学校

菊池 真衣

田園の 色づく稲穂に 胸躍る

利根町立布川小学校

寺田 純子

撥躍り 秋風に舞え 布川子囃子

同 佐藤 信之

夏の夜に 未来を照らせ 夢火花

利根町立文小学校

石山 貴司

蝉の声 まえと変わらぬ 郷の香

利根町立文間小学校

田崎 博文

足運び 稲穂色づき 実り待つ

利根町立利根中学校

川村 由紀夫

ゲームセット 天仰ぐ眼に 光る汗

同 山口 淳一

伊豆合宿 ほとばしる汗 蝉しぐれ

終止符

行方市立玉造小学校

片岡 満

教員生活

あと数ヶ月で終止符を打つ

切なさど淋しさ どこかに安堵感

希望に満ちて赴任した三十数年前

出会った子どもたちは数千人

それぞれに思い出が

良くも悪くも思い出が

今はその日々を思い出すばかり

あれでよかったのかなどの反省も

同窓会の案内

近況報告の電話やメール

飲み会への誘い

教え子も五十路を過ぎたか

懐かしさを胸に

今を精一杯勤めあげよう

編集後記

今回お届けします会報第一七五号は、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の改善・充実に取り組んでいる学校の声を皆様にお届けすることをねらいの基にして作成しています。

特集記事の教育座談会では、県内各地区より推薦されました先生方に、本年度のテーマに沿って話し合いをしていただきました。自身が濃く、テーマにふさわしい教育座談会となりました。次期学習指導要領に向けての各校の取組が紹介されており、それぞれ学校の教育活動で活かしていたことができれば幸いです。

ご多用の中、原稿をお寄せいただきました先生方、教育座談会の司会の先生をはじめ企画員、座談者の皆様方に、心より感謝申し上げます。

なお、第一七五号は、正副委員長及び次の担当者にて編集させていただきます。

- ◎八木 克弘(ひ・中根小)
- ◎人見 洋(水・妻里小)
- ◎栗田 寛子(水・飯富中)
- ◎佐藤 光央(水・赤塚小)
- ◎藤枝 透(水・常磐小)
- ◎藤枝 馨子(水・常澄中)